



それは未知の経験だった。

今日まで他人の『心の声』を遠く近く聴き続けてきたが、心の中にまで入り込もうなどという事を殉は考えた事すら無かった。

彼にとって『心の声』とは、いわば通りすがりの道に面した家々から漏れ聞こえてくる団欒や喧騒の音と同じものであった。

時に関心を持ち聞き耳を立てる事はあっても、門をくぐり、家の壁や窓に耳を押し当ててむさぼり聞くものでは決して無かった。

ましてやそれ以上の事をするとなると、もはや敷地に入り込むどころの騒ぎではない。

勝手に玄関から奥に上がり込むに等しかった。

だが今、彼は加夏子の内なる迷宮を進んでいる。

自分と加夏子が強くシンクロしているという確信が殉にはあった。

それが皮肉な運命から生じたものだという自覚は、まだなかったにせよ。

◇

まるで密林だった。

出鱈目に密集した木々、幹の見えぬほど絡まり合った蔦は、加夏子の内面を彼が視覚化したイメージだと判っていても邪魔で、前進を阻む障害物に違いなかった。

蔦の棘は、日本刀の切っ先の形をしている。

背筋に冷たいものを感じながら殉は先を急いだ。

切り傷だらけになりながら夢中で蔦の森を進んでゆくうちに、いきなり何も無い空間に出た。

いた

ポツンと独り加夏子が立っていた。学生服が簾のようにズタズタだ。

白い肌に張り付いた布の残骸が奇妙なデザインの服のように見える。

殉は近づくと、加夏子の肩を掴み強く揺さぶった。

「カナちゃん、僕だ、ジュンだよ！ 助けに来た。帰るんだ、こんな所にいちゃいけない！」

加夏子の虚ろな目が落ちる程見開かれた。

「イヤァ！ もう許して、私を斬らないで！ お願いだから来ないでえ！！」

「なに言ってるんだ、僕だよ、忘れちゃったのか？！」

激しく暴れる加夏子を殉は強く抱き締めた。

ひしと抱き、動きが収まるまで待っていた。

不意に腕の中の抵抗が消えた。

血の気が失せた加夏子の腕がすうっと持ち上がる。

「アレハ、アナタ？」

殉は加夏子の指差す方を見た。

長身の男が立っている。その手に、真っ赤に染まった刀がひとつ。

喉の奥が凍りついた。

兄さん…どうして…

◇

風などないのに、微かに揺らいでいるように見えた。

加夏子の記憶が造り出したその男は、

痩せた長身

黒衣

切長の目

酷薄な唇

手に提げた刀

それ以外の細部は全てぼやけ、周囲の闇と交わるかのようにディテールがはっきりしなかった。

時折、男の周囲が光る。

青、赤、黄…

火花のような刹那の光の中に、幾つもの光景が浮かんで消える。

全てが、目の前に立つ男の映像だった。

喉にわだかまる呼気の塊を殉は飲み込んだ。

彼は盲目のままこの世に生を受けた。生身の目で世界を見た事が無いと加夏子に語ったのは嘘ではない。

だが彼は、この世界を全く『視た』事が無い訳ではなかった。

ごくまれに『声』と同じく他人の視覚から情報を得る事があったのだ。

当たり前の風景では無い。

自分のものではない目… 他人の意識やその状態…

視覚以外の五感から流れ込んでくる様々な情報…

それらが幾重にも重なり混じり合った、歪んだ世界の姿。

何の前触れも無しに頭に浮かぶ『世界』を、幼い頃から今日まで彼は嫌悪してきた。

こんなに醜く歪んだ世界を直視しなくてよい自分の境遇に、密かに感謝すらしていた。

そんな彼が鮮明に覚えている数少ない映像の一つが、唯一の庇護者であった兄の姿だった。

弟に見せるべく、鏡の前に立ち微動だにせず自らを凝視する兄の姿を、彼は尊敬と羨望と共に心の奥深くに刻み込んでいたのだ。

今、目の前に立つ男の姿は、細部こそはっきりしないものの彼の兄の姿に余りにも酷似していた。

何よりも切長の目に宿る強烈な意思の光が、それが長らく会っていないたった一人の彼の肉親である事を殉に告げていた。

判らない

あれは確かに兄さんだ

でも…でも…

嘘だ

「兄さんが… 兄さんがカナちゃんを、こんな酷い目にあわせたっていうのか。嘘だっ！！！」

男が薄く笑う。

それは殉の知る、孤独と慈愛を背負った優しい兄の笑みでは決してなかった。

乾いた、狼の目。

「お前は兄さんなんかじゃない！ お前はカナちゃんを食い尽そうとしている食人鬼だ！！』

強い怒りの念が沸き起こる。

すると男の姿が一瞬、大きく揺らいで見えた。

もしかして…

そうか！

殉は思念を凝らし男を睨みつけた。

消えろ

きえろ！

きえてしまえ！

きえろキエロキエロ、きえろお～！！

口ウソクの炎のように、殉の思念が男の姿を大きく揺らした。

殉は気づいたのだ。

ここはカナちゃんの心の中

そして彼女は、無意識にせよ僕がここまで入り込む事を許した

僕らの意識が強く同調していなければ、こんな事は出来なかった

それなら僕が直接、彼女の意識に影響を与える事も出来る筈ではないか

ユラユラと右に左に揺れる男に、殉はありったけの思念をぶつけ続けた。

悪夢の形が陽炎のように薄らいでくる。

ここへたどり着く途中で見た、鳶の模様にしか見えなかった加夏子の断片的な記憶。

それが、殉の向かおうとしている場所がどんな所なのかを教えてくれた。

ここは恐らく、加夏子にとって最後の避難所だったのだろう。

長い間彼女は、ここへ逃げ込む事でおぞましい過去からの迫害を逃れてきたのだ。

だがその記憶が何かの拍子に戻ってしまい、同時にあの男は、彼女の最も中心となるこの場所に居座ってしまったのだ。

もうここは避難所では無い。屠殺場だ。

際限無く切り刻まれ殺され続ける地獄から逃れる為、彼女の肉体は生命活動を止めようとしていた。

そんな事はさせない

あと、あと少し…

渾身の念を殉が放つ。

臃になった男の姿が、その力で霧散した。

やったぞっ！

◇

薄明るくなった闇の中、じっと動かない加夏子を抱いて殉は立っていた。

「もう大丈夫。怖いものなんてもう何もないから。帰ろう。みんな待ってる」

そっと腕の中の加夏子に話しかけた。

身じろぎもしなかった加夏子が、糸に引かれたように顔を上げる。

殉の背に戦慄が走った。

「イルジャン、ココニ」

加夏子の右手が刃と化して殉の腹に突き刺さっていた。

「か…カナ…ちゃ…ん…？」

気がつくやうに殉は、黒衣を着て手に刀を掲げていた。

「違う… 僕はあいつじゃない、アイツは僕の兄さんなんかじゃない！ 違う、ちがうんだああ！！」

… ヒ、ヒ、ヒヤ～ハハハハハ …

狂気をはらんだ哄笑が響き渡った。